

# 「大学博物館の課題と展望」

- 【出席者】 後藤 新治（大学博物館協議会委員、国際文化学部教授）  
高倉 洋彰（大学博物館長、国際文化学部教授）  
中村 晴光（大学博物館管理運営委員、大学事務長）  
松原 知生（大学博物館管理運営委員、国際文化学部准教授、  
博物館学芸員課程主任）  
山田 順（大学博物館協議会委員、国際文化学部准教授）  
山田 能久（大学博物館事務室）  
米倉 立子（大学博物館学芸員）  
司会 小林 洋一（百年史編纂準備委員長、大学博物館管理運営委員、  
神学部長）

司会 本日はご多忙の中、「大学博物館の課題と展望」をテーマに掲げる座談会にお集まりいただきまして、心から感謝申し上げます。西南学院の歴史にとって、大学博物館が開館されたことは画期的なことだと思います。今回、『西南学院史紀要』が大学博物館を特集として組んだのは、ただ博物館の開館が画期的だというだけではなく、この博物館には創立者でありますC. K. ドージャーのメモリアルホールがあり、西南学院がその教育の基盤としているキリスト教の歴史と文化に関する展示を特化して展開しており、その意味で西南学院の建学の精神を理解する上でも大きな意義があると思うからです。

この座談会では、博物館の課題と将来の展望、期待あるいは夢について自由にお話いただきたいと思っております。それでは初めに、中村事務長から自己紹介を含めて、完成した博物館の感想を一言ずつ述べていただければと思います。

## ◇完成した博物館の感想

中村 大学事務長の中村です。博物館が出来まして、中・高の講堂で使われていたものを壊すことなく、生きた建物として残したということです。1921年に竣工され86年という歴史があるわけですけれども、創設者の学校をつくるという意気込みが伝わってきます。当時、国内では著名な設計者のW. M. ヴォーリズの設計で、関西学院大学、同志社大学など歴史のある大学と同一設計者の建物が西南学院に残っているというのはそれだけでも、本学の歴史というものを深く感じますね。そしてそれが福岡市指定有形文化財として保存できるということは非常に嬉しいこ



大学事務長  
中村 晴光

とだと思っています。それから、この博物館が、本学の建学の精神に基づくキリスト教を特色とする博物館として作られている、これもやはり日本の中でも唯一の、と私は思うんですが、そういう特色をもった博物館としてスタートしたことは非常に嬉しく思っています。

**米倉** 博物館学芸員の米倉です。私は2006年の1月末、現在の博物館となる建物のまだ何にもない中に入って、初めてなのに何となく懐かしいような、ここで働けるのなら気持ちよく過ごせるのではないかと思ったわけです。西南に長くいらっしゃる方にとっては愛着ある建物だと思いますけれども、そういった意味では、初めてそこに足を踏み入れた私のような者にとっても何となく心地のいい場所というのは、その建物自体への親近感からきていると思います。展示物について言えば、5月13日に何とか開館しまして、いわゆるお宝的なものはそんなにあるわけじゃないのですが、キリスト教の歴史全体を概観できる場所になったかなと思っています。

**高倉** 館長をしております高倉です。2005年の秋にオープンした九州国立博物館の創設に関係しておりましたので、この博物館の展示品が80点という数の少なさが非常に気になっておりました。しかし、オープンの時にいろんな方に来ていただいて、そして感想をうかがってみると皆さんやっぱりすばらしいとおっしゃいました。一つは展示品に1つのテーマ性があるということを誉めていただきました。もう一つはやはり建物ですね。「この大学博物館は建物が一番すばらしい展示品ですね」と言われたんですけど、まさにその通

りだと思っています。この博物館はまず、外観に歴史の重みがある。そして中へ入っていくと、長い間生徒たちが使った減り具合、やはり長い時間使い込んできた歴史の重みというものがあるって、それが来館者に自由に、見ていただけるんですね。こういう博物館を作って良かったなと思います。この種の博物館は一般に学生がそれほど来ないという印象がありますが、ここはかなり来てくれています。ですからキリスト教だけではなくて学院の歴史、こういう大学に入学したことの良いところを体感させるいい役割を担っていると思います。



**松原** 国際文化学部の松原です。私は博物館学芸員課程の主任をさせていただいて、その関係で博物館管理運営委員も担当しています。私は2005年4月に本学に赴任しましたので、博物館準備の作業自体には直接関わっていませんが、やはりみなさんがおっしゃっているように、最初に入った印象としては、「懐かしさ」を感じさせるというのがまずありました。新しくできた博物館であるにもかかわらず、ずっと昔からそこにあるような違和感のなさというか、親しみを覚える空間になっていると思います。東キャンパス全体が、博物館の赤レンガ造りという様式に統一される形で構想されており、環境との調和も取れている点に、驚きというか好感をもったわけです。古い建

物が新しい建築に取り囲まれているという印象はまったく受けず、逆に博物館の建築が全体の調和の一つの基点になっているというのが第一印象です。

加えて、建築内部の空間が非常に貴重な雰囲気を保っていることも、大きな魅力だと思います。このような懐かしさやオーラは、作ろうと思って作れるものではない。そういった物が醸し出す雰囲気も一つの展示物として体感できるというよさがありますね。

**後藤** 博物館協議会委員で、国際文化学部の後藤です。私は3点ほど、感想を述べさせていただきます。1点目は、こういうふうな博物館のハードというか建物ができて、やっと西南学院大学の歴史の記憶装置というものができたなど感じています。歴史というのは確かに文字など、さまざまなものによって記憶され、語り継がれていくんですけど、しっかりとした建築を媒体として、こういう記憶装置が復元され、保存されていくということは本学の歴史にとって重要なことで、常に歴史を想起するよすがになると思います。

2番目はいわゆる大学全体の建築様式の原点がここで定まったということです。私は大学芸術環境推進委員でもありますけれども、例えばキャンパスに新しい建物を建てる時、どういう素材、どういう様式で建てるか、建築物はそういうことも議論になるわけですが、その場合、常に帰るべき点として、このドージャー記念館(博物館)が、きちんとみなさんの記憶の中に定まったことが重要じゃないかと思います。

それから、3点目はヴォーリズの建築様式です。20世紀の建築というのは、味もそっけもない、ホワイトキューブ

で、直方体だけの建築が蔓延しているわけですが、そういう中であってこの20世紀初頭の端正な佇まいをもった建築が創建当初の姿で保存されているというのは地域社会の人々に対してもひとつの潤いというか、憩いの場所になるんじゃないでしょうか。そういう意味で地域社会に対してもこの博物館の開館は非常に大きな意味を持ったと思います。



国際文化学部教授  
後藤 新治

**山田(順)** 博物館協議委員で国際文化学部の山田です。私も後藤先生と同じく、博物館準備委員会から関わらせていただきました。大学のキャンパスというのは、広さが限られているために、講義棟など、古いものはやがて壊され、より快適で使いやすいものに新しく建て替えられていくのが常です。それは現代の都市空間も同じで、経済効率が優先される中で、古い町並みなどは次々に破壊され、都市の歴史の記憶はやがて完全に消失してしまいます。そういう時代の流れの中で、都市や地域の歴史を意識的に保存していくという行為は、非常に大きな意味のあることだと思います。ローマやフィレンツェなどイタリアの歴史都市にしても、街の中心部に必ず旧市街や歴史地区が保存されていて、現代の都市空間の中に独自の歴史の痕跡が顔を出すというところに、その最大の魅力があるわけです。

今回、大学博物館というかたちで学院の歴史を意識的に保存していく場ができたということは、ある意味、西南の「歴史地区の誕生」と言えるのではないかと思います。それは同時に100周年というひとつの節目に向けて、学院が新たなアイデンティティを確立していくためにも、学院の歴史と向き合う大切な場所として機能していくものだと思います。

**山田(能)** 博物館事務室の山田です。開館以前に勤務していた図書館にキリスト教展示資料コーナーがありましたが、資料点数が少なくスペースも狭かったせいか見学者が少なかったので、博物館に入館者が来るのかと心配していました。始まってみると、竣工当時の姿に復元された博物館に入り、階段のくぼみ、講堂の椅子の落書きなどが印象的でした。また、キリスト教については歴史的なことは知識がなくて、博物館の展示室を見て、キリスト教の歴史が分かりやすく展示してあるなどと思い、安心しました。

#### ◇来館者について

**司会** ありがとうございます。皆さんから博物館についての思い、意義について聞くことができました。博物館の展示とともに建物のすばらしさについて伺えたと思います。

次に来館者のことについてお話いただきたいと思います。開館して約10カ月たったわけですが、来館者の数、どういう人が一番多いのか、来館者の反応、感想についてはいかがですか。

**山田(能)** 来館者数は、月平均約1000名、一般の方の来館が一番多い。年齢層は

特に中高年の方が多い。その中で卒業生がいろんなグループで来館されるケースが多いようです。卒業生は、2、3割だと思います。大学生については、やはり授業期間中が多く、夏休みなどの休暇期間や試験期間中は少ないようです。来館者の感想は「歴史を感じる」や「日本におけるキリスト教は歴史で習ったので何となく分かり、おもしろかった」などがありました。開館当初は市内のあるデイケアセンターなどからマイクロバスで来られて、車椅子の方もいらっしゃいました。

**司会** 今、山田さんから詳しい資料を用意していただき、人数、反応を報告してもらいましたが、皆さんの方で、付け加える点、質問等がありませんでしょうか。

**高倉** 2月現在の総数ですが、年齢別で見ると大人が約7000人。これに対して本学学生が1998人、他大学学生が213人ということで、合わせると2200人くらいになります。学生は高校生も含めて考えると全体の27%くらいで、少ないようにみえますが、学生が大変多いというのがこの博物館の大きな特徴です。備付の感想ノートに、本学学生で、「こういう建物があることを知らなかった」というのがありましたから、これからもっと来てくれると思います。それから、韓国からの来館者が多いというのも特徴の一つです。これは同じグループからの来館ではないでしょうか？

**山田(能)** 旅行代理店や添乗員などが連れて来られるみたいです。入館料が無料ということもあると思います。旅行の案内中に西南の博物館が載せられているためか、空港や港から直接こちらに来られることもあるんですよ。

高倉 韓国は45%くらいがキリスト教徒ということで、仏教徒とともに多い。半々くらいかな。外国語版パンフレットも前任の副学長から、少し落ち着いたら考えましようと言われているんですが、英語版はあるので、これの韓国語版を作らないといけませんね。

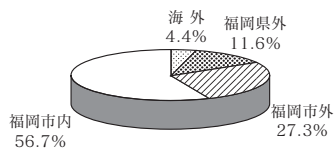
後藤 それから、「開館時は車椅子の利用者が比較的多かったが、最近は少なくなった」というコメントがありますが、このあたりは、我々が開館当初、バリアフリーやユニバーサルデザインの問題で、危惧していました。最近は車椅子だと行きにくいということが口コミで広まって、車椅子の入館者が減ってきたことが、そういうことと関

係あるのでしょうか？

山田(能) 車椅子の利用者は一時期多くて、十数人のうち3、4人が車椅子を利用されていましたが、ダイケアセンターの方が来館されなくなってから、ほとんどありません。そのダイケアセンターに通っている方が、ひととおりに来館したからじゃないでしょうか。もっとPRすれば、多くのダイケアセンターからみえるかもしれないですね。



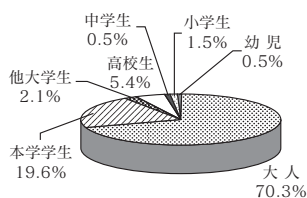
博物館事務室  
山田 能久



地域別来館者数 (2007.2現在、不明者を除く)

地域別来館者数 (2007.2現在)

海外	284
福岡県外	743
福岡市外	1,746
福岡市内	3,627
不明	3,771
計	10,171 人



年齢別来館者数 (2007.2現在)

年齢別来館者数 (2007.2現在)

大人	7,153
本学学生	1,998
他大学生	213
高校生	552
中学生	54
小学生	152
幼児	49
計	10,171 人

- 開館時は車椅子利用の来館者が多く、5～9月は月平均3～10人。最近は少ない。
- 演奏会・学会・講演会開催時は、1日約200～300人。
- 海外では、韓国からの来館者が多い。
- 7～12月は高校の団体が多い。
- 卒業生は月平均10～15人。

山田(順) デイケアとして来館されたその車椅子の方々は、当然、2階以上にも上がられたのですね？

山田(能) そうですね。東側ドアからスロープを使って、入館されました。その当時は、まだ車椅子用階段昇降機を購入前でしたので、2階の見学には使っていませんでした。後期は神学部の学生が毎週来ましたが、昇降機を使うのは不安感があるというので、友達が4人がかりで担いで、上がっていました。この前の講演会の時には外部からの電話で、エレベーターはありますかとか、電動車椅子では入れますか、という問い合わせがありました。

司会 座談会というよりは管理運営委員会という感じになりましたが(笑い) …。

高倉 4月から隣にコミュニティーセンターが開館しますが、あそこに座り心地のいいホールができるとどちらが魅力的か、という場合が起り得る。去年、この博物館で九州考古学会を開かせてもらったんですが、最初のうちは座り心地が悪いなどと文句を言っていたけど、帰るところになると、皆さん、環境がすばらしい、という印象に変わったんですね。隣に座り心地のいいホールができますよと言っても、今年もやはりここで去年通りにやりたい、と言われる。嬉しい話です。

#### ◇今後の展示品の収集、特別展示等

司会 博物館の来館者や使われ方について話を伺いましたが、詳しい資料を準備して下さってありがとうございます。次に展示物について、みなさんの期待、夢、今後の展示物の収集などに関して、お話を伺います。私は、学

芸員の米倉さんの「この博物館はレブリカが多いですね」という一言が気に入っているんですが、まずは米倉さんからお願いします。

米倉 何気ない一言が、そこまで小林先生の胸に残っていたというのは恐縮ですが(笑い)、実際、実物が少ないのは感じざるを得ないというのが現実です。今後、どういうふうに展開するかを考えると、当館のオリジナルがほしいですね。ちょうど今朝、まとまった形で、フィリピンやエチオピアなどの資料が数点入って来たのですが、今までキリスト教が入っていても、それほど研究や展示対象になされてこなかった地域の資料を今後集めていきたいと思います。収集の方針としては日本、アジア、いわゆる西洋ヨーロッパではない地域のキリスト教のもの、九州における日本のキリスト教の資料、さらにキリスト教誕生の母胎となったユダヤ教も考えています。ユダヤ教についていえば、日本の博物館で取り上げるのは大変珍しいと思います。また今後、当館が目指すのは、大学という教育、研究の場であるので、営利的なことを考えずに自分達の展示を構築することであり、これまで研究されてこなかった分野、また今後発展の可能性のあるキリスト教の資料を中心に集めていきたいと思いますね。

司会 ありがとうございます。特別展示の企画などはありますか。

米倉 そろそろ、開館1周年を迎えますので、5月14日から6月30日まで、平戸にある生月島の「島の館」という、かくれキリシタン資料のコレクションでユニークな展示を行っている博物館から資料をお借りして、「納戸の奥のキリシタン」というタイトルで、かく



れキリシタンに関する展示を準備中です。そこの信者の方が使っていらっしゃる一連のご神体を展示することで、信仰のあり様の凝縮したエッセンスを見られるようにしようと思っています。それ以降は、はっきり決まっていないのですが、当館ならではとか、西南ならではの展示、つまりユダヤ教やヴォーリズなどで特別展を企画していたらと思っています。

**高倉** 展示室がそう広くないので、ここでキリスト教全体を展示するのは難しいと思いますが、一つ目的を定めていくのが重要です。ヨーロッパのキリスト教について、ここで展示しようと思ったら、とても足りない、それがアジアにどう広がり、日本に定着してきたのかを、展示していくんですが、それについての資料を今後できるだけ積み重ねていきたいと思います。それと特別展示を今年度中にやりたかったんですが、開館したばかりということで、一年待って学芸員室を特別展示室に使うということになりました。入館者の数は博物館がどんな活動しているかに影響されるんですが、特別展示を行うことによって、同じ人が何度も来てくれるようになりますので、特別展示を企画したい。基本的にはキリスト教の展示だが、学院史関連の展示でもいいのではないかと思います。

**後藤** 今、高倉先生がおっしゃったように、この博物館のコレクションをどのような方針で集めていくかが今後、非常に重要な問題になってくると思います。今年の生月島の特展のサブタイトルが「生月島におけるキリスト教の受容と変容」だったと思いますが、この博物館の方針として、たとえば「キリスト教文化の受容と変容」というテ

マを統一的に掲げて、今後コレクションを集めていけると思うんです。九州を中心にフィリピンをはじめとした東南アジア、余裕があれば、東ヨーロッパ、北アフリカ、そこまで広げられるか分かりませんが、これまでのキリスト教文化の中心を回避して、周辺部分の文化変容のダイナミズムというか、その中にむしろ文化の独自性の活力を見出していくというやり方で、コレクションを集め、また、展覧会をやっていくというのも博物館の意味があるのではないかと思います。

もう一つは、学内の資源を活用するということ。ここは学芸員が米倉さん1人しかいませんが、考えてみれば190名の本学の先生方、大学院生を含めると、もっとおられますが、一人ひとりが優れた研究者・教育者であるので、教員をゲストキュレーターと考えた場合、非常に贅沢だと思うのです。美術作品の個展やコンサートを開催する形で研究テーマを教員からすくい上げていく、そういう学内の資源をぜひ、活用していきたいと思います。

**司会** 西南学院史資料の展示についてはどうでしょうか。



**高倉** 以前、学院史資料室というのがありましたよね。あそこに展示されていた資料が本館の3階や4階などにバラバラに置いてありますが、ああいうものを展示したらいい。ヨーロッパやアジアを通して、キリスト教が日本にど

ういうふうに入ってきたかを展示する  
といいと思うんです。学院史をどう捉  
えるかというのは非常に重要な問題で  
す。ただし、学院史資料をそのまま展  
示すると莫大な量になるので、例えば、  
特別展示をしない時に1階の部屋を利  
用してはどうかと思います。今の状態  
では太陽光線で赤茶けてしまって、と  
ても見るに耐えないし、2号館のパネ  
ルも内容が古いし、うす汚れている。  
こういったものも大学全体が博物館で  
あることを考えていかないといけない  
ですね。学院史については4月以降、  
ちゃんと考えないといけない課題だ  
と思いますが、我々の一つの分野だと  
思います。

## ◇2階講堂と3階バルコニーの活用

**司会** 博物館資料、また学院史資料の展  
示や収集、その方向性などについて  
語っていただきまして、将来、期待の  
持てるお話だったと思います。次に博  
物館2階の講堂の使われ方について、  
どういう利用があるのかを確認した  
いと思います。神学部が学期中の毎週月  
曜日の午前中にチャペルを行っていま  
すが、同時に、神学部のキリスト教音  
楽の授業も行われており、1階の展示  
室の見学者だけじゃなくて、2階の方  
もよく使われると思いますがどうで  
しょうか？

**山田(能)** 開館をしてから、講堂使用の  
申込みは講演会関係が7回、音楽会関  
係が7回、音楽の練習等が8回、修学  
懇談会が6回、神学部が毎週月曜日に  
チャペルアワーを行っています。日曜  
日は特別な利用の場合は、開館しま  
すが、展示室は閉めています。中には日  
曜日でも開けてもらったら、来館者に

もっと見ていただけるのという意見  
もあります。

**司会** では、3階のバルコニーの利用に  
ついてはどうでしょう。

**高倉** 来館者は3階によく行きますか？

**米倉** 先程のエレベーターの問題にも関  
連しますが、2階までは階段も広いし、  
講堂もきれいなので、案内すれば、見  
学されます。3階になると、階段も狭  
く、角度もある。建物に興味のある方  
は上がってくださるんですが、来館者  
のパーセンテージから言えば、少ない  
ですね。現状では展示が学院史の年表  
だけなので、もっと3階のスペースを  
使いたいと思っているんですが、やは  
り脚が不自由な方や高齢者にとっては  
負担が大きいでしょうね。



博物館学芸員  
米倉 立子

**高倉** 3階は本来、客席だったのをギャ  
ラリーとして使うために、一部を残し  
てフラットにしたという経緯があつて、  
旧講堂の創建時の姿を壊してしまつて  
いるので、活用しないといけないと思  
いますが、ただ、博物館を作るときに  
予算がかなりカットされたので、3階  
は将来の整備にまわそうということに  
なったんです。冷暖房の配管がむきだ  
しだったりしていますが、施設課の方  
がうまくカバーしてくれたので、利用  
できるようになっています。学院史に  
関しては3階にぜひ、展示したいと  
思っているんですが、なかなか現状で  
は難しいところがありますね。

**後藤** 3階は確かにギャラリーですが、



窓が大きく採られていて、2階に光が  
さんさんと降り注ぐヴォーリズの建築  
の特徴であるわけです。3階の窓を全  
部つぶして、ギャラリーにして何かを  
展示するというのはどうもなじまない  
気がします。そうなると、どうしたら  
いいか。例えば、デジタルアーカイブ  
のブースを並べて、3階は研究スペ  
ースあるいは資料スペースのような一  
種のライブラリーのようにする。例  
えば、ヴォーリズの全建築の画像な  
どがモニターで見られるとか、そう  
いうスペースにすれば、1、2階と  
の区別がつきやすいと思います。

**司会** 収蔵庫は完成したのでしょうか？

**米倉** 収蔵庫はまだ未完成です。棚が来  
週設置で、空調は来年度の設置予定  
で、設備を整えていきたいと思っ  
ています。

**高倉** 博物館を作る途中で、登録博物  
館にしたいという考えがありましたが、  
博物館法上では大学博物館は該当し  
ないので、博物館相当施設に申請し  
ておいた方がいいと思います。公開  
講演や特別展をするなど、申請す  
るには計画表などが必要なのですが、  
そういう形が徐々に整ってきてい  
るので、2年後に申請したいと思っ  
ています。

**山田(順)** 一見、展示には使いにくい  
と思える2、3階の吹き抜け構造を  
逆によく利用して、特別展などの  
時に、面白い見せ方ができるのでは  
ないかと思えます。たとえば、3階  
バルコニーからしか見られないよう  
な大きな映像を、2階のスクリーン  
に投影したり、上から下を覗いて  
鑑賞するような、ダイナミックな  
展示空間として活用するなど、可  
能性は十分にあるんじゃないでし  
ょうか。

**後藤** 確か計画段階では2階の講堂の  
床面をひとつのスクリーンに見立て  
巨大な壁画などを投影して、上から  
鑑賞するようなやり方があるんじ  
ゃないかって言っていましたね。

**山田(順)** 実際にヨーロッパの博物  
館などでも、そのような見せ方が  
行われています。たとえばドイツ  
のケルン考古学博物館などでは、  
3階くらい上のぼって初めて下の  
ローマ時代の巨大モザイクが一  
望できます。それと同じような  
見せ方が、この博物館でも可能  
ではないかと思えます。



**司会** なるほど、そういう方法もある  
んですね。それから3階へのエレベ  
ーターが設置できなかったことは  
残念でしたが、この件については、  
どうでしょうか。

**後藤** 大学院生の感想で気になる  
ことがありましたが、「バリアフリー  
対策として、渡り廊下を作って  
コミュニティーセンター内とエレベ  
ーターを共有して、ブリッジを  
かける」というのがありました  
が、こういう可能性は将来  
残されているんでしょうか？

**中村** コミュニティーセンターを  
設計する際、博物館へのブリ  
ッジ設置は話題になったん  
ですが、それは今後の検討  
課題だと思います。

## ◇教育・研究のための活用

**司会** 博物館を利用して、教育・研究を活性化させることが重要で、実際に学院、あるいは大学の構成員に活用されていると思います。授業等の活用についての話をお願いします。

**山田(順)** キリスト教学の授業で、試みとして、各クラス1回ずつ見学させ、レポートを提出させてみました。西南の学生はキリスト教学が必修になっていますが、学生の中には、なぜこんな授業を受けなければならないのか、という思いを抱いている人も少なくありません。従って、彼らが自ら選んで入学した大学がどのような大学なのか、ということから理解させる必要があります。そういう状況の中で、実際に博物館に足を運び、古い建物の中を歩き回り、西南の歴史を肌で感じ取りながら、同時にキリスト教の歴史や文化を学ぶことは、大変意味深いことだと思います。

**後藤** 私の場合はアートウォッチングと称して教室の外に連れ出して、百道浜のパブリックアートや近く的美術館に行ったりするんですが、その一環として博物館を利用しました。私もレポートを書かせた、というより作らせているんですが、文字だけではなく、何でもいいと言うんですよ。すると、それぞれ学生が創意工夫を凝らして、詩を作ったり、工作をしたりして、いろんなものを持ってくる。そういう発想にああいう具体的なものは刺激を与えると思います。学生は今後もこういう授業を是非続けて欲しいと言ってくれます。

**司会** 学生の反応、感想で、「博物館実習をしてほしい」と要望がありますが、

これは準備が進んでいるのでしょうか。  
**松原** 具体的にはまだですが、ゆくゆくは実習生の受け入れをお願いしたいと思っています。昨年度の博物館実習生は44名でしたが、今年度の希望者は63名とかなり増えてきています。さらに国際文化学部が定員増をしたことで、今後ますます増えることが予想されます。他大学にも学芸員課程が設置されたこともあり、実習受入れの交渉が難航しましたが、本学の博物館で受け入れていただくことで、この点は軽減されると思います。



国際文化学部准教授  
松原 知生

今回、実習の希望者に、博物館実習の動機を尋ねたところ、明確な目的意識やモチベーションなど、深く考えている学生があまり多くはないのではないかという感じを受けました。大学博物館で実習を受けることによって、ただ単に資格取得のためではなく、もっと身近な学院の歴史を知ってもらいたい、かなり具体的な目的を持って学ぶ意識が芽生えるのではないかと思います。具体的な実習案としては、例えば、ある講演会や展覧会を行う場合、本学の実習生が中心になって企画を考えてもらって、具体化していくことによって、教員だけでなく学生も運営に関わっていくことが可能になるのではないかと思います。

**高倉** 一般の博物館は所蔵資料の5%を展示し、残りの95%は倉庫にあります。それを利用していろんな展示が展開で

きるんですが、西南の場合は所蔵資料を100%展示しているので、なかなかうまくいかない（笑）。今後、博物館実習の受け入れ先の少なさの問題もあって、それも設置の大きな目的の一つですので、所蔵資料の充実と実習施設としての受け入れ態勢を整えることは、ぜひ、来年度からでもやっていきたいと思っています。

**司会** 実際問題で、キリスト教学の受講者に「博物館の見学レポートを書きなさい」と言った時に、学生の中には博物館に来て、ひたすら展示品の説明文を写してレポートにしようとしている人がかなりいるんですね。

**米倉** その点についてはかなり消極的な学生がいるという印象があります。先に自分で探すことも必要な過程なのですが、まず「それはどこにありますか」と聞きに来るんですね。「キリスト教について何か興味のあることを調べてきなさい」ということになると、学生にとって自分にはそれほど関係なく、最低限の力で終わらせようと思うようです。彼らがいかに自分の感覚で、自分との接点でモノを見ようとするか。例えば、世界の歴史の中の一つとして、それを自分の関心とどういうふうに関わりつけるか、自分のリアルな感覚との接点を見出せるかでモチベーションが生まれるのではないのでしょうか。世界各地のものを目の前で見られるというのが博物館の価値の一つではないかと思います。文化でも地理でも歴史でも、最初の関心の糸口を博物館が提供することができれば次の新しい世界につながるることができるのではないのでしょうか。

**高倉** 博物館は展示が最大の生命線で、そこが発信する情報をもとにして、展

示だけではなく博物館活動を展開しています。梅棹忠夫先生が「博物館という名前ではだめだ、博情館であるべきだ」と言っていますが、そういう意味で、この博物館にキリスト教文化に関する情報を結集させて、それを活用するということが必要だと思います。しかし、現状をみると、神学部、国際文化学部にはかなり理解が普及していますが、他学部に関しては、知らない人もいるという状況の中ではなかなか難しい。例えば、20人の研究所員を集めると本学の教員の1割が集まる。そういう形になって、より周知できると思います。近い将来、来年度あたりから博物館の活用を情報分野や知識の蓄積分野でも広めていく。それがこの博物館の一番の活用ではないかと思います。

**後藤** 私もまさにそのことを申し上げようと思っていました。学内GPを活用して、それによる業績をきちっと評価していただきたい。やりっぱなしではなく、教員の業績になる評価システムを作ってほしいと思います。

## ◇他の博物館との連携

**司会** それでは、他の博物館との連携について、高倉先生に展望をお話いただきたいと思います。

**高倉** 博物館協議会というのがありまして、九州国立博物館の三輪嘉六館長と福岡市博物館の西憲一郎館長にその評議員になっていただいています。このお二人に評議員を依頼したのは、まず福岡市博物館はこの博物館から近いし、キリスト教関連の展示もあるということです。もちろん、博物館は法的に地域の研究が義務づけられているので、福岡市博物館と連携していくこ

とは重要だと思います。

もう一つ、九州国立博物館は4月から独立法人国立文化財機構に名前が変わるんですが、去年の12月にキリスト教展示を開催しています。九州国博は重要で、素晴らしい資料があることを考えると重要な連携相手であると考えられます。

ただ、当面はこの2つだろうと思いますが、この2つと連携すればいいというわけではなくて、近隣の福岡市および周辺の博物館などと活動していき、徐々に輪を広げていこうと思っています。

**後藤** 地元のビックネームができましたが、コンスタントな連携と同時にテンポラリーな連携もあると思うんです。実は滋賀県立近代美術館が、来年ヴォーリズの建築事務所が開かれて100年になるので、ヴォーリス展を開催するけれども、よかつたら西南学院大学さんもどうですか、というオファーが来ているんです。このように他館と連携するコンスタントなパートナーでなくて、

テーマさえ合えば、それなりに連携して、例えば教員がスタッフに加わって、研究会を開き、その成果を展覧会で発表するという連携のあり方も一方でやるべきでは、というより、やりたいと思っています。

**司会** 時間がなくなってきましたので、最後に博物館に対する希望を簡単に語っていただいて終わりにしたいと思います。

#### ◇期待と希望

**山田(能)** 地域の方に来ていただくために、PRや広報活動を行ったり、エレベーターなどの施設や設備を整えてほしいです。そのための予算措置に期待したいと思います。

**山田(順)** 今後の大学博物館の特色ある活動として、アジアや九州からの視点を確立していくことが重要だと思います。例えば、キリスト教の歴史や文化を扱うにしても、アジアや九州という地域におけるキリスト教の文化的受容



という視点から、それらを捉えていくことは大変興味深いことです。同時に、大学の知的財産である多くの先生方の研究と深く連携しながら博物館の活動を展開していくことが大切だと思います。そういう意味でも、大学博物館が担っている教育・研究に関する役割と可能性は、無限の広がりがあると思います。

**後藤** これは将来というよりも近々の問題なのですが、東キャンパスの中庭の整備ということで、可能であればここをハープ園にしたい。そうなると博物館も関わって、大学院、法科大学院、クロスプラザ、コミュニティーセンターなど東キャンパス全体が一丸となって、回廊で取り囲まれた植物園というかハープ園のようなものを作って、そこで収穫したものでミュージアムグッズやカタログなどを販売したり、あるいはレストランではハープを利用してランチなどを提供するという、一種の地域社会に対するサービスや収益事業、そういうものを含めて博物館が一種のリーダーシップをとっていか

らいいんじゃないかと思います。

**松原** やはり箱（建物）がすばらしいというのがありますが、箱に頼ってはいけません。箱に甘えて箱があるからそれでいいというふうに完結してしまわずに、展示物の収集とか展覧会イベントの開催で常に流動的に動いていく博物館であってほしいと思っています。僕は米倉さんの「早く博物館になりたい」（つまり設備や作品がまだ十分に揃っていない）という言葉が印象に残っているんですが、完成してしまう博物館ではなくて、ある意味で未完成のまま、ずっと動き続けていくことが望ましいと思います。

もう一つ重要だと思うのは、東キャンパスという地域に開かれた場所に建っていることによって、大学と地域の「結び目」になり得るということです。それだけではなく、例えば、西南の起源と未来の結び目、あるいは大学と地域、あるいは教員と学生、教員同士を結ぶ一つの媒介として役立つような博物館であってほしいと思います。

**高倉** 正確には覚えていませんけど、感



想ノートに「このような博物館のある大学に学ぶことを誇りに思います」と書いてありました。これは1人の学生が書いているわけですが、こういうふうにみんなが思ってくれるような博物館にしていきたいと思います。

**米倉** やはり、居心地の良さというのが他館には見出せないこの良さの一つでもあると思うのですが、それと同時に学問的なこと、教育的なことを常に情報発信しなければならない。それだけではなく、今度は地域社会とつながるための情報発信も早急に行い、その中で他館や来館者との交流などを通してこちらも情報を吸収し、それをまた発信のアイデアにして、次につなげていきたいと思っています。

**中村** 博物館の開館については少し関わらせていただきましたが、2004年の改築工事に時に、屋根がはがされ、壁や床もはがされて、解体されたわけですが、2005年3月に福岡県西方沖地震が起こった。幸いにして、博物館の耐震工事が進んでいたこともあり、レンガ壁は崩壊しなかった、まさに生き残った建物だったと思うんです。この建物にある博物館として大切に育て上げることだと思います。また韓国の方も多く来られるということですが、海外にも誇れる博物館であってほしいですね。

**司会** 博物館が開館してから10カ月が経ち、いろいろ欠けたもの、足りないものもあるわけですが、非常に順調なスタートを切って、期待された博物館として展開しつつあることがこの座談会を通じて分かりました。ここで最後に語られました皆様からの希望や期待がやがて実現し、西南学院にとりまして、また地域社会において、なくてはならない博物館として充実発展し、建学の

精神の理解を深めるためにも貢献できるように期待したいと思います。皆様のおかげによりまして大変有意義な座談会になりました。ありがとうございました。

※この座談会は、2007(平成19)年3月8日に西南クロスプラザで実施しました。